

---

# 色とイロという

かーばんくる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

色とイロという

### 【Nコード】

N5007Z

### 【作者名】

かーばんくる

### 【あらすじ】

住んでいた村を焼き、初めての外界へと旅立つ主人公はじめてみるモノ、様々な人、それらの色を見て何を思うのか、何を感じるのか。

色をテーマにした小説です。

プロットもまったくありません。

それでも良ければどうぞ。

## 赤と青と蒼（前書き）

思いつきで書き始めた小説です（・・・・・）

それでも良かったらどうぞ

## 赤と青と蒼

見上げる空は果てしないほど蒼く、視線を前に向ければそこには青々とした海が広がっている。

綺麗だ。

それなのに何故なのだろうか、後ろに広がる色は赤い。炎の赤、血の赤、狂気の紅。

いつだったか、誰かが言っていたような気がする。ただ狂ってる。と、そう一言呟いていた。

あれは誰だっただろうか？ まあ、そんなことはどうでもいい。その誰かはいつの間にかいなくなっていたのだから。

それに、ここにはもう居る必要がなくなった。

一歩足を踏み出せば眼前に広がる海はどこまでも広く、見上げる空はどこまでも深く、振り返れば見える景色はどこまでも赤く。

そしてそれらを暖かな微笑みを浮かべる少年はまるで聖者のよう  
で。

一歩足を踏み出せばそれだけ前の青は近づき背後の赤は遠のく。

二歩、三歩、と歩み続けければその分だけまた赤が遠のく。

四歩、五歩、と足音をならせば、背後からはその倍の速度の足音が聞こえた。

「待って」

背後から声を掛けられれば少年は歩みを止め振り返る。

「どうかしたの？」

微笑みを浮かべて振り返れば自らに声を掛けた相手、赤い色を背景に息を荒げ立つ少女に問い掛ける。

「……何で」

「何が？」

質問に質問で返す少年に少女は怒りに顔を真っ赤に染め上げ声を荒げる。

「何がって！ 何でこんなことを！」

「こんなこと？ それは村を焼いたこと？ それとも皆を殺そうとしたこと？」

「両方よ！」

何故目の前の少女はここまで怒っているのか？

少年は不思議でならなかった。

「村を焼いたのは君たちを殺そうと思ったからで、君たちを殺そうとしたのは邪魔だったからかな？」

「邪魔だったからって！ そんな事で！」

あれ？ そんな理由だったっけ？

「……ああ、ごめん間違えた。今の嘘だから忘れていいよ」

「なっ……！」

「ごめんごめん、理由だったね。村を焼いたのも、皆を殺そうとしたのも同じ理由なんだ」

「同じ、理由？」

「そう、同じ理由だよ。ここまで言えばもう分かるんじゃないかな？ ゆり」

その言葉を聞いて少女、ゆりは悔しそうにうつむけば、蚊の鳴くような声で呟いた。

「……じゃあ、あの時気にしてないって、そう言った事も嘘なの？」

「ああ、その言葉は本心だよ」

「だったら何で！」

ゆりは零れ落ちそうな程、目に涙を溜め、少年に掴みかかる。

「何で！ 気にしてないなら何でこんなことしたの！」

それも少年は微笑み続ける。

「そう、僕は気にしてないけどね、それでもこの村とそこの住人は

遅かれ早かれ殺しておかないといけなかったんだよ」

遂には涙を零し嗚咽するゆりにやさしい声で少年は「だからね」と続ける。

とん

少年に体を押されたゆりはバランスを崩し、数歩後ろに下がる。信じられないと言った表情で少年を見つめるゆり。その背後から炎に包まれた家がゆっくりとゆりに向って崩れてきていた。

「バイバイ、ゆりちゃん」

ゆりがその言葉の理解するよりも早く崩れ、倒れてきた家の木材がゆりに降り注いでいた。

少年がそれに背を向け一步を踏みだした時、ずんとひととき大きな音が背後から聞こえた。

これでよし。

小さく呟き少年はまた歩き出す。

一步足を踏み出せばそれだけ前の青は近づき背後の赤は遠のく。

二歩、三歩、と歩み続ければその分だけまた赤が遠のく。

四歩、五歩、と足音を鳴らせばそれだけ心が晴れていく。

六歩、七歩、と歩けば今度は何が変わるのだろうか。

少年は歩き続ける。一步を踏み出すごとに感じる変化に喜びながら。

蒼を頭上に、赤を背後に、青を目前に。

いつしか赤は消える。なら今度は何がその色の変わりになるのだろうか？

小さく笑みを零し、少年は六歩目を踏み出した。

## 赤と青と蒼（後書き）

いかがでしたか？

感想やレビューなどをいただけるとありがたいです。  
（ ^ ^ ）



## 黒と赤と紅（前書き）

前回と続いてまだプロローグみたいなものです（- - ;）

物語が本格的に進むのはもう少し先になりそうです（+ | +）

## 黒と赤と紅

ここには村には無かった沢山の色がある。沢山の人がいる。その色の一つ一つに全く同じ色は一つもない。それと同じように沢山の人々は誰一人として同じ人間はいなかった。

## 面白い

それらはその一つ一つが少年の興味を誘った。

この世界はなんて素晴らしいのだろう。

少年はただ純粹にそう思う。

いままで居た村は全く面白味が無かった。

自分が生活していた部屋は白一色で統一されており、一步外へ出れば家の色に温かみは皆無だった。

村人とは言え、外見こそそれぞれが全く違ったが自らを見つめる目だけは全くおんなじだった。

そう全く同じ無機質なものだった。

いや、違うか。

あの少女、あやだけは他の人間とは全く違った。

よく笑い、泣き、活発に動き回り、自分を見る目も温かみのある感情のこもったものだった。

何故だろう？

首を傾げ考えども分からないい。

本当に何故なのだろう。

「まあ、いいか」

ものの数秒で少年は思考を放棄する。

もともと考え事をすることはあまり得意ではない。

そう、そんな些細なことより今、この瞬間を楽しもう。

ここにはこんなに感情がいっぱいあるのだから。

ここにはこんなに色が沢山あるのだから。

「ホント、この世界は素晴らしいよ」

燃える草花は出発の日を彷彿とさせる赤、焦げた部分は限りなく黒に近い灰色。黒になりきららない黒。地面に倒れる人間から流れ出す液体は炎とはまた違う赤。

見渡せば辺り一面焼け野原、地面に倒れ伏す兵士たち。

そこには誰一人として立っている者はいなかった。

まだ炎の燃え広がっていない緑の草花と焼け焦げ黒くなった草花。炎の赤、そう紅と血の赤。

その対比がなんとも美しい。

少年はほうとため息を漏らした。

「でも、分からないな」

何故ここに倒れている人達は殺し合いをしていたのだろうか。しかもこんなにも大人数で。

しかも自分が死ぬ瞬間になればその人間は恐怖する。

何故なのだろうか。殺し合っているのだから自分は殺すだけでなく殺される可能性もあるという事を知らなかったのだろうか……。

「面白いなあ」

そう、本当に面白い。

面白い、楽しい。こんな感情ははじめてだ。

これが面白い、これが楽しい。

ああ、面白いと感じる事が楽しい。

ああ、楽しいと感じる事が面白い。

次はどこに行こうか？

今度はどこに行こうか？

少年は一步二歩と足を踏み出す。

一步二歩、ああ楽しい。

三步四歩、ああ面白い。

五歩六歩、ああ愉快だ。

次行く場所も楽しいといいな。  
次行く場所も面白いといいな。  
次行く場所も愉快だといいな。

七歩八歩、九歩十歩。

少年は歩き続ける、次の楽しい事を探して。次の面白い事を探して。

ああ、本当に愉快だ。

## 黒と赤と紅（後書き）

楽しんでいただけましたか？

感想、レビューなどを頂けたらとても嬉しいです。

## 蒼と赤と紅（前書き）

いよいよ物語が本格的に始まります（＾　＾）

## 蒼と赤と紅

「ねえ知ってる？ この世界には私たちの他にもう一種類の人間がいるって」

誰かの話し声、この頃よく聞く噂話だ。

机に顔を伏せる少年は何の気もなしにその話に耳を傾けた。

「なんでも私たちが文明を築く前から居た人達なんだって」

噂の発端は何だったのだろうか？

「この間焼けた村の跡が一つ見つかったでしょ？」

ああそうだった、あの村が原因だった？ でも何で昔の人間がいたって噂になったんだろう？

「で、そこで見つかった道具のほとんどがどんなに有名な学者にも使い方が分かんなかったんだって」

へえ、そうだったんだ、それは知らなかった。

「で、その村の状態を見るに、ほんの一週間前に焼けたばかりらしいよ」

ふーん そうなんだ、でもその村人はどうなったんだろ、まさか全員死んだってわけ無いだろうし。

「それで怖いのがここから」



噂話をしていた少女が声のトーンを少し落とす。

怖いのがって、この話いつの間にホラーになったんだ？

「その焼けた村からは当然の如く焼けた死体が沢山見つかったわけよ、でもね、その死体は焼け焦げてはいたものの、どうも死因は焼死じゃないらしいのよ」

焼死じゃないって、誰かに殺されたとでも？

「その村で発見された死体は必ず体のどこかなくなっていたらしいよ？ だからこれは村人を誰かが殺した後、その誰かが村に火を放ったのかもね？」

……無理があると思う。

「で、最近その村の付近で戦争での被害がすごいことになってんのよ」

……すごいことって。

「両国の全部隊が全滅、しかも最近起こった戦闘全部よ」

……なんかこの後のオチ分かった気がする。

「これは生き残った兵士の人が言った事なんだけど、全滅させたのは子供一人で、どんな攻撃も効かなかったんだって」

……全滅、したんじゃないかったっけ？

「もしかしたらその村で殺された子供が怨霊になって近くで殺し合  
いをしている人達を手当たり次第に殺してるのかもよ？」

……やっぱり、アホらし

机に伏せていた顔を上げてがたりと音を立て椅子から立ち上がる。  
教室でくだらない噂話に耳を傾けるよりも屋上で復習でもしてい  
たほうがよっぽど有意義だ。

屋上へと歩を進めながら心の中で悪態を着く

ここの連中ときたら全くくだらない噂話に興じるだけで全く自覚  
が足りない。

屋上の扉を乱暴に開けば眼前に広がる蒼い空、広大な大地。

その壮大な景色に少年はしばし息をするのも忘れて魅入ってしま  
う。

少年はここからみる景色がとても大好きだった。

何者のも侵される事のない広々とした空。高台に建てられたこの  
建物からは都市の全貌を眺めることができる。

ここは魔導で覇道を築いたシキ王国

広大な領土を持ち、今なおその領土を拡大しようと画策する王国、  
その首都であるサイには優秀な魔導師を育成するための学校、多彩  
学園がある。

困難な入学査定を突破した一握りのエリート魔層師しか入ること  
の出来ない学園だ。

その学園に今年度入学を決めた内木蒼斗<sup>ないきそうと</sup>だったが、入学を決めて  
彼は愕然とした。

そのあまりのレベルの低さに。

入学査定を實力で突破した者はほんの一部、その他は貴族の御曹子などで、所謂裏口入学で入学を決めた者ばかりだった。

だからこそ蒼斗は決めた、周りに染まらずに鍛錬を怠らないと。

屋上を中心まで歩いていき、そこで深い集中状態に入る。

魔道を使うにあたって大切なのは色のイメージだ、炎を出すには赤、水を出すには青

といった具合に。

そのイメージが具体的なほど魔道の力は増す。大きく分類すれば赤でも紅、紅蓮、朱色などだ。

魔道は目的に応じて、イメージする色の種類、具体性、強さなどで使い分ける。

イメージするは赤、紅、紅蓮、すべてを焼き尽くす紅蓮。

深くそして強くイメージする蒼斗。天にかざす手には紅蓮の炎が顕現する。

強く深く、もっと強く、もっと深く。

イメージを深めれば深める程、強めれば強めるほどその炎の勢いは増していく。

不意に蒼斗の手の平に宿った業火は何の前触れもなく霧散する。

やっぱりこの辺りが限界か。

蒼斗は深くため息を吐き天を仰いだ。

もうすぐこの国は隣国へ侵略を開始する、そうなればこの学園の生徒も出兵しなければならない。

その時までにもっと上手く、もっと強く魔導を使えるようにならないと。

## 蒼と赤と紅（後書き）

今回は説明パートでした（+|+）

期待していた方、スミマセンでした（| ^ |）  
|

## 蒼と青（前書き）

今回はかなり短いです

## 蒼と青

「今日このクラスに編入生が来るらしいよ」

え、ホンと！ と、何時もと同じ調子で女子達が騒ぎだす。

転入生か、こんな時期に珍しい、大方、裏口入学で入ってきたやつと同じように金を積んだのだろう。

机に顔を伏せながらいやでも耳に入ってくる金持ち女子たちの会話から情報を得る。

でも、珍しいものだ。普通この学園は編入を受け入れない、入学の時に生徒を大量に受け入れ、ほかに編入生を受け入れる余裕はない。それでも編入を決めるには入学試験よりも更に難しい編入試験を突破するか、入学試験以上の大金を積むしかない。

どうせ、編入試験を突破するのは無理だろうから裏口で編入を決めたのだろう。

しばらくすれば始業を告げるチャイムが校内に鳴り響く。蒼斗はすぐさま机から伏せていた顔を上げ姿勢を正す。つい先ほどまで騒がしくついていたクラスメイトもすぐさま自らの席に着く。

教室内は静寂に包まれているがクラスメイトの誰もが編入生がどんな人間か気になっている様だ。……目が、きらきらと輝いている。

このクラスの中で転入生が気になっていないのは蒼斗ただ一人のようだ。

クラスメイトが期待して待つこと約1分、教室の扉がゆっくりと

開いた。

入ってきた、のは教師と……一人の少年。

「既に知ってる者もいると思うが、今日、このクラスに生徒が一人編入することになった」

初老の先生が自分の隣に立つ少年に顔を向ける。

「君、自己紹介しなさい」

「はい」

歩いて、黒板のまで歩いて来た少年はとても線が細く、整った顔立ちをしていた。

「始めまして、色村<sup>しきむら</sup> 青慈<sup>せいじ</sup>です。よろしくお願いします」

ぺこりと深く頭を下げた少年、青慈はにっこりと柔和な笑みを浮かべた。

「色村君、君の席はあそこにいる生徒の隣です。何か分からないことがあったら隣の彼に訊きなさい」

そう言っ先生が指差したのは……。

……俺？

クラス内で最も編入生に興味の無い生徒、内木蒼斗だった。



## 蒼と青（後書き）

すみません、今回散々投稿が遅れた挙句かなり短かったです。

## 無色（前書き）

しばらくは学園パートです。

## 無色

「よろしく」

隣に座った少年、青慈が声を掛けてくる。

どうしてこうなった。

あの後先生に名指しされ、蒼斗が何もことばを発する間もなく、色村青慈は隣の席にやってきた。

しかも、分からないことがあったら隣の席の生徒、つまり蒼斗に訊けと言うのだ。

まったく冗談じゃない。

自分は一分でも、一秒でも早く、魔導の腕を磨かなければならぬというのに、編入生の世話などで時間を取られるなど、我慢ならない。

気づけば連絡事項は終了したようで、先生は教室から退出していた。

一限目は何だっただろうかと考えていたとき、隣に座る青慈が声を掛けてきた。

「ねえ、えっと隣の人」

……隣の人、その呼び名はあんまりなのではないか？

「隣の人って、俺のこと？」

「うん、そうだよ、名前聞いてなかったから」

だからといってその呼び名はひどいのではないのか？

「蒼斗、俺は内木蒼斗。よろしく」

「うん、よろしく」

うれしそうになつこりと笑みを深める青慈。

「で、何が訊きたかった？」

「ああ、うん、最初の授業は何なのかなあって」

ああ、成程、編入初日なら分からないのも当たり前か。

「一限目は実習だ。ほら、周りもみんな移動し始めてるだろ？」

「ふーん……ありがとう」

「ほら、案内してやるから、着いて来いよ」

「あ、ああ、うん」

教室を出る蒼斗とそれを追いかける青慈。

蒼とは誰にも聞こえないように小さくため息を吐いた。

ちゃんと面倒見るあたり、俺も真面目だよなあ。

実習場、つまり所謂運動場で蒼斗はただばかと口をあけて損の風景を見つめていた。

いや、蒼斗だけでなく他の生徒や、実習担当の教師もだ。

実習の授業、それはその名の通り、魔導の実習を行う授業だ。授業の初めに教師が編入生である青慈の实力を見たいと言ったのだ。

この教師はこの学園にしては珍しく、裏口入学の制度をひどく嫌っている。

おそらく、実力で編入試験を突破したならいいが、もし金を積んで入って来たので張れば実力不足を理由に徹底的にしごくつもりなのだろう。

で、結論から言えば内木青慈は裏口ではなく、正式に編入してきた生徒だ。

実力はまったく申し分なかった。……いや、むしろ実力がありすぎて困るくらいだった。

実際困っているのだ。現在進行形で。

自身の持てる最大の力で炎を作りなさいといわれ、青慈はしばらく目を閉じて集中したかと思えば、不意に右手をまる頭上に掲げ、まるで地獄の業火のような炎弾を作り出したのだ。

少なくとも半径三メートルはあるその炎弾は今もなお拡大中である。

なんだこれ。

おそらくその場にいるすべての人の共通意見であろう。普通一流の魔導師が全力で作った炎弾といえば半径一メートルぐらいなのだ。それをこの目の前の編入生はゆうにその三倍はする炎弾を作り出して見せたのだ。しかも、いまだに拡大中なのだ。

「……もういいぞ、炎を消してくれ！」

一足先に我に帰った教師が青慈に指示を出す。

はい、と素直に炎を消す青慈を目にし、ようやく他の生徒も我に返る。

何だ今の、ありねえだろ、と、とたんに騒がしくなる生徒たち。

それを前に何かおかしいことをやってしまったのだろうか、と不安顔な青慈が立ちつくす。

ていうか、こいつ自分がどれだけ非常識な事をやらしたのか気づいてないし。

「え、え、きよ、今日の実習は自習にへんこうです。皆さんは教

室に戻るように」

それだけ言々と走って実習場を去っていく教師。大方、学園長にでも報告に行ったのだろう。

さて、どうしたものか……。

教師が去った後、騒がしく話をする生徒と、それを前におどおどと立ち尽くす青慈を見て蒼斗は蒼思うのだった。

無色<sup>2</sup> (前書き)

気づいたら100PV超えてました……

正直びっくりです

無色了了

はあ、とため息をひとつ。

今自分の目の前に座るこいつ（・・・）はため息の原因全く分かっていない様子で、それがまた新たなため息を誘う。

現在、寮の一室の蒼斗の部屋に部屋の主である蒼斗とこいつ（・・・）こと青慈はいた。

はあ、ともうひとつ新たにため息を吐けば蒼斗はようやく目の前に座るそのこいつ（・・・）に対して言葉を発した。

「……お前、今日自分がなにをやったか理解してないのか？」

そのこいつ（・・・）は常時展開している微笑の中に少しばかり訝しげな色を混ぜながら首を傾げる。

その様子に蒼斗はさらにため息を深くする。

「……青慈、お前な……さっきの魔導だけだな、あれがお前の全力か？」

「違うよ？ あと二倍くらいは軽く出せるけど……」

「はあ？ 二倍い！？」

そのあまりのでたらめっぷりに蒼斗は軽く米神を押さえる。

だめだ、こいつ、それがどれだけ異常か全く理解してない……

「あのな青慈、ひとつ訊くが魔導使う時どんなイメージをしてるんだ？ ほら、さっきの炎とか……」

「赤」

……即答。

「あ、赤？」

「うん、赤」



…… またもや即答。

「も、もう少し詳しく」

「無理」

…… 無理って、しかもまた即答。

「な、何故？」

「えっと、赤は赤としか言えないし」

「ほ、ほら例えるとか出来るだろ？ 炎のような赤、とか業火のような赤とか」

「無理、だって、ただ赤としかイメージしてないもん」

…… こいつマジか……。

魔導はイメージが単純なら単純なほど弱くなり、複雑なら複雑なほど強くなる。だから、今青慈が言ったようにただ単に赤としかイメージしていないのなら炎はろうそくの火程度のものしか作れないはず。

ならあの炎はただこいつ（・・・）の魔導の馬力が強すぎるだけか？

頭上に？マークを浮かべ首を傾げる青慈を見る。

いや、流石にそれは無いだろ、単純なイメージであの出力って、どんな化物だよ。だとしたらこいつが嘘ついているとか？

「あ、あの、さっきから何考え込んでるの？」

…… うん、こいつに限ってそれは無さそうだ。まだ付き合いは浅いがそれは無いと断言する自信がある。…… だとすれば、こいつの赤って、もしかして本当の意味での赤なのか？

最も混じり気の無い色、本当の意味での純粹な赤。魔導学ではどれ

だけ色をイメージしても本当のその色をイメージできないとされている。ただ単順に赤をイメージしても、その赤はどこか白っぽかったり、黄色がかったいたり、本当の赤をイメージできていないのだ。純粹に思い描くその色をイメージしない限り、魔導は威力を発揮できない。だからそれを補うためにイメージを複雑化し、強固のにすることによって魔導は威力を高めているのだ。

だがもし、完璧に思い描く色をイメージ出来たなら発現する魔導は最大のどの魔導よりも高い出力を誇ると魔導学ではされている。

もし、もしこいつ（・・・）が本当の色をイメージできるとしたら、あの馬鹿げた出力も頷ける。……でも、そんな事が可能なのか？

「あの……もしもし？ 聞こえてる？」

ああもう、分からない！

「おゝい、聞こえてますか？」

……もう、どうでもいいか。

「おゝい、もしもっし」

……とりあえず今は今日からルームメイトになるこいつ（・・・）とどういつ付き合い方をするか考えなくては。

無色了了（後書き）

……話が進まない

無色っ3

青慈がこの学園に編入してきてから早一週間、青慈は早くもこのクラスに馴染んでしまった。

編入初日からとんでもない魔導を見せつけ、もしかしたら馴染むのに時間がかかるかも知れない、などと心配をしていた蒼斗だったのだが、そんな心配は全く無用だったようで、クラスメイトと良く話す姿を見かける。しかも、入学当初から在籍している蒼斗よりも多く、だ。

蒼斗にとってそれは別に構わなかった、むしろ面倒を見る羽目にならなくて好都合などと思っていたのだが……。

「ねえ、蒼斗さっきの授業でここが分からなかったんだけど……」  
……何故他の人に聞かない。

確かに初日に先生から面倒を見るよう言われたのは蒼斗なのだが、今はその蒼斗よりも仲の良いクラスメイトなど沢山いるはずだ。そういった等に分ければ良いものを。

……何故俺に訊く。

放課後寮に戻った後でも青慈は蒼斗に質問を重ねる。しかも訊かれた蒼斗自身も律儀に教えてしまうのである。

何だ、何故俺に訊く、あれか？ ルームメイトだからなのか？

考えども理由は分からず……ただいつも放課後にとっていた魔導の自主練の時間ばかりが減っていく。

……コイツ、良くこの学園に編入出来たな。

毎日のように続く質問地獄に純粹にそう思う。

それほど青慈の質問は多く、授業内容を理解できていなかった。

「ねえ、蒼斗、ここなんだけど……」

「オイ、何時も俺に訊く」

「何でって、それは蒼斗がクラスで一番成績良いし、魔導もすごいし」

魔導が凄いねえコイツにこういわれてもなあ……。

「他の奴らに訊いたらどうだ？ この位なら他の奴らでも簡単に教えてくれるだろ？ お前友達が多いんだし」

「友達？ そんな人いないよ？」

「は？ いないってお前……クラスの奴らとよく話してるじゃないか」

「良く話してるけど、あの人たちはそれだけ、友達なんかじゃないよ」

……あれだけよく話しといて友達じゃないって。

「お前な、それは無いんじゃないか？ 少なくとも相手はお前のと友達だと思ってるぞ」

そう言えば青慈は少し困ったような顔をする。

「そういわれてもこまるなあ……で、ここおしえてくれない」

「はあ……ここはな……」

なんだかんだ言いながらもこうして教えてしまつ自分は青慈に甘いのかもしれない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5007z/>

---

色とイロという

2012年1月13日21時54分発行